

# 愛隣館研修センターニュース 第84号

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 2F TEL 075-621-3849 FAX 075-621-1579  
 E-mail : airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替 01020-5-39321  
 編集発行所：社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者：平田 義

## 「3・11」を覚えて

未曾有の大地震と津波に東北が襲われた2011年3月11日。愛隣館研修センターでは、被災地と繋がり、様々な出会いを積み重ねながら1年後の3月11日を迎えました。関西での公共電波による被災地現状報告は、当時を考えるとはるかに減少し、被災地との心の距離に変化を生じさせてしまっているように感じています。

今回は、2011年4月、宮城県石巻でボランティアとして私たちを受け入れ、出会い、繋がってくださった、石巻祥心会の勝又さんからお話を伺い、今一度、繋がることの意味を考え直す機会にしたいと思います。

2011年3月11日の記憶

社会福祉法人石巻祥心会  
勝又 裕

今回この文章を書かせて頂くにあたり、ボランティアで来て頂いた皆様に「本当にありがとうございます」その言葉しかありません。私の事を知らない方も多いと思います。建設業者と思っていた方が大半ではないでしょうか。私はこの震災で社会福祉法人石巻祥心会（以下、当法人）から特殊班として命を受け、震災の日から八月まで、復興作業に取り組んでいた勝又と申します。

当時、私は仮設ひたかみ園（以下、施設）で利用者さん5名に付き添ってビニールハウスで野菜作りの作業をしていました。地震発生時、裏の山が崩れ出しアスファルトが砂煙を出しながら割れ始め、皆を守らなければとの思いから、利用者さんの元へ行くと、パニックを起こした利用者さんが一人、私に泣きながら抱き着いてきました。たまたま荷物を運びに来ていた職員が二名来ていたのが幸運で、私一人では何もできなかったと思います。揺れが治まると頭の中には“津波”の二文字が出てきました。私ともう一人の職員で周辺住民の安否確認に行った際、防災無線から、津波到達時刻が三十分後と、放送が聞こえてきました。そこに当法人理事長と事務局長も来て、施設への避難指示があり、周辺住民を誘導しましたが、津波の到達まで時間がなく、私が車で高齢者や子供を乗せて施設に戻ろうとしたその時、川を遡ってきた津波が道路に勢いよく流れ込んできました。止まったら巻き込まれると咄嗟に判断し、津波を突っ切り施設に戻りました。そこからは生き

る為の戦いでした。避難してきた周辺住民は130名を超え、子供・妊婦・高齢者・津波に流された人など、本当にいろいろな人が集まりました。その日の夜は雪が降っていて、女性・子供・高齢者は講堂の中に入ってもらい、男性は屋外で過ごしました。津波と余震の恐怖が集まった皆さんを襲っている中、私の判断で燃やせる物は燃やして暖を取り、発電機が有ったので投光器を付け、私もハウスに来る前にたまたま灯油を買ってきていたのでそれも使い、こうして一日目が終わりました。

震災後二日目に津波が引き、職員二人で周辺の確認に行きました。辺りは、車や船、家屋など、考えられない物が破壊され、流され、道路に散乱し、騒然としていました。沢山の遺体があり今でも目に焼き付いて離れません。それは私たちが、けして忘れてはならず、後にその事を引き継いでいかなければならないことだと思います。

四日目に、当法人本部より施設からの撤退命令が有り、私は避難をしている住民の皆さんに謝ることしか出来ず私自身の儚さを痛感しました。その後は仮設風呂の建設やグループホームの撤去作業、日本財団ホーム小国の郷仮設住宅の整備など、あっという間の五ヶ月でした。

寄稿の依頼を受けた時、どのようにこの記事を書けば良いのか頭の中で葛藤があり、途中書きながら涙が出てきました。震災から一年が経ち、私の中ではあっという間でした。まだまだ復興には遠い道乗りですが、私たち地域に住んでいる人たちが前進しなければなりません。今回ボランティアに来ていただいた皆様、大変有難うございました。機会があれば、石巻にお越しください。





